

一対の額

第三代秋田赤十字病院長

神崎 三益

私がいた頃の秋田日赤の講堂は正面の両側が入り口になっていて遅刻して入ってくる者には一寸都合の悪い設計だった。

その左右の入り口の上にナイチンゲールのランプを持った絵と、光明皇后が癩患者を洗ってやっておられる絵がかかっていた。古い人には記憶があるだろう。

私は世界の看護婦の手本がナイチンゲールなら、日本のそれは光明皇后だと思っている。

この一対の額は最初からそうであったのではない。

一番初めの病院の正庁とよんだいかめしい講堂から次の東根小屋町の病院に移った時まではナイチンゲールの額だけだった。

大東亜戦争が始まって乙女の血は湧き、驚く程の熱意で赤十字の旗の下に集まって来た。

次から次と出て行く救護班、その中からいくつもの美談が生まれた。

この話も、その中の一つで私は30数年経った今日も忘れないで、看護学生への訓話の種にしている。

何回生であったか忘れたが、やはり戦時救護をめざして、はげしい競争試験をパスして入ってきたひとりに佐藤直子さんという生徒がいた。

横手の女学校の卒業生と記憶している。秋田師範（現在秋田大学）の先生の妹さんで、はっきりした顔立ちのスポーツウーマンタイプの人だった。手形山のスキーなどでは鮮やかな腕前を披露したものだ。卒業と同時に戦時救護に出征した。処が不幸にも、結核になって内地に護送されてきた。

救護看護婦の身分は軍属だから当然陸軍病院に入れられる処を幸いに母院に入院できた。

私の回診の度毎次第に悪化してゆくのがはっきり判るのだが、直さんはいつも「有り難うございます。次第に具合もよろしい」と丁寧に挨拶する。苦しいだろうにといじらしかった。

ところが、婦長さんに聞くと、直さんは後輩の生徒には、厳しくて、手当や処置には文句をいって、ああするのだ、こうするのだとひとつひとつ教えていたそうだ。

忘れもしない昭和18年4月28日、到頭、息が絶えた。そのあと、兄さんがみえて、直子の遺言ですから解剖をして頂きたい。ひとつにはお世話になった先生方へのお礼の意味で何かのお役に立ちたい。そして今ひとつは、秋田は田舎で解剖が少ない。私達も在学中それを残念に思っていた。だから後輩の人達にぜひ私の解剖を見せて上げたいと、こう申すのでございますとの話。

私は、これを聞いて、なんという先輩愛、素人ならいざしらず、解剖がどうして行われるかを、よく知っている看護婦、生前は人前に一寸でも膚を見せることを恥じらっていた20幾才の若い乙女が、解剖台の上に、死後とは言え、敢えて全裸をさらそうとは、なんという深い後輩への愛情だろうと感激した。厚く感謝してお引き受けした。2月11日紀元節（現在の建国記念日）支部の講堂で両陛下のお写真を拝む拝賀式に出席したままのモーニングの上に手術衣をつけて、全生徒の見つめる前で解剖をさせて頂いた。

その時の光景は30数年たった今日でもはっきり臉に浮かぶ。

それから49日忌明けの日、兄さんが院長室にみえて香典返しの一部を病院に寄付したい。直子はいつも後輩の教育のことを熱心に考えていましたから何かのお役に立たせて頂きたいとの有り難い申し出。

そこで考えに浮かんだのが、光明皇后の事、もしナイチンゲールと一対になったらどんなによいだろう。私の思っている事が形になるではないか。

秋田によい画家はいないだろうかと、知り合いに相談すると、高橋万年（萬年）さんという仏画をよくする帝展にも入選したよい人がいるとの返事。早速その知人を通じて依頼した。

万年（萬年）さんは、それでは絵をかける場所と対になる相手の絵も見たいからと病院にやってこられた。講堂に案内すると、ナイチンゲールの絵を見て、あっと声をあげ、院長さん、これは私がかいたものです。この病院の1回生か2回生の看護婦生徒が卒業に当たって後輩に残したいからこの絵をかいてくれとまだ若かった私の処へ頼みにこられたものです。裏をご覧になると、その事が書いてありますよとの話。

私はその偶然に驚くと同時にうれしくもあった。

やがて絵が出来てきたので、立派に表装し、ナイチンゲールの絵も粗末な紙表装をその機会に綺麗に布表装にしかえた。その時、裏を見ると万年（萬年）さんの言われた通り、卒業して行く者が後輩のためにこれを残すと書いてあった。

事実はこの通りの事で、他の人にはあまり興味もなく、また私のような感激もないかもしれない。しかし、私のように一生を赤十字看護婦教育に終始した者にとっては、偶然とか単なる絵の問題とかで看過しえないものがある。

世間の人から赤十字看護婦はと誉められたり、また私のような内輪の者でさえも、さすがにと思う例に度々出会うその度毎、これはどうしてだろうと思う。

院長はじめ指導者が格別すぐれているとも、施設・設備が他にまさっているとも思わないのに、優れた看護婦が生まれてくるのはどうしてだろう。

佐藤直子さんの解剖のこと、乏しいお小遣いを出し合って後輩の教えになるものを残そうと言う、この先輩後輩の間を結ぶ愛の絆が、どんな世情世相になっても、どうか切れることのないようにとただひたすらに念願するのみです。

（出典：秋田院友昭和53年第24号）

註) 当該卒業生のお名前は正しくは「佐藤 直」さんですが、神崎三益先生の書かれた原文のまま記載しています。